

特集

抗アミロイド β 抗体

アルツハイマー病新薬をよみとく^{ベシック}B面, やくだつ^{クリニカル}C面

特集にあたって

高齢化の加速するわが国において、認知症は喫緊の課題です。厚生労働省研究班が実施した認知症の患者数の推計では、2022年時点で全国に認知症の患者が443万人、認知症の手前の状態の軽度認知障害の患者が558万人と見積もられ、今後さらに増加することが試算されています。アルツハイマー病は、認知症の原因として最も多い疾患で、その6割くらいを占めると考えられています。

アルツハイマー病に対する薬剤として、症状を改善する効果のあるコリンエステラーゼ阻害薬やNMDA受容体拮抗薬が従来から用いられてきましたが、これらは一時的に症状を改善させるものであり、進行を抑える効果はありませんでした。アルツハイマー病の病態の本流に作用して進行を抑制する作用をもつ薬剤はさまざまなものが開発され、患者を対象にした治験が行われてきましたが、20年近くにわたって失敗続きでした。そのようななか、アルツハイマー病の待望の新薬として、2023年9月にレカネマブ、2024年9月にはドナネマブがわが国でも承認され、一般向けにも大きなニュースになりました。これらの薬剤は、アルツハイマー病の病態において中心的な役割を担うアミロイド β に作用する薬剤で、病態の進行を遅らせ、症状の進行を遅らせる効果が期待されます。一方、従来から用いられてきた症状改善薬とは、対象病期を含む患者の適

応や、投与方法、副作用への備えなどの点で大きく異なります。新規作用機序をもつ革新的な医薬品であるため、最適使用推進ガイドラインが公開されています。それを正しく理解して使用していく必要があります。

これらの新薬の登場と時期を同じくして、2024年1月に『共生社会の実現を推進するための認知症基本法』が施行されました。この認知症基本法は、認知症の人が尊厳を保ちながら希望をもって暮らすことができることを目的に掲げています。レカネマブやドナネマブは、患者本人の日常生活動作の自立が保たれる期間を延長させる効果が示されており、この認知症基本法の目的に沿った治療薬であるといえるでしょう。

本特集では、患者が自立してその人らしく生活できることにつながるこれらの治療薬をどう正しく使っていくかを具体的にお示ししつつ、治療を支えるチームの一員の薬剤師として押さえておきたい基本知識を経験豊富な先生方に解説いただきました。新しい認知症診療の理解の一助となれば幸いです。

東京都健康長寿医療センター 脳神経内科 医長

井原 涼子